

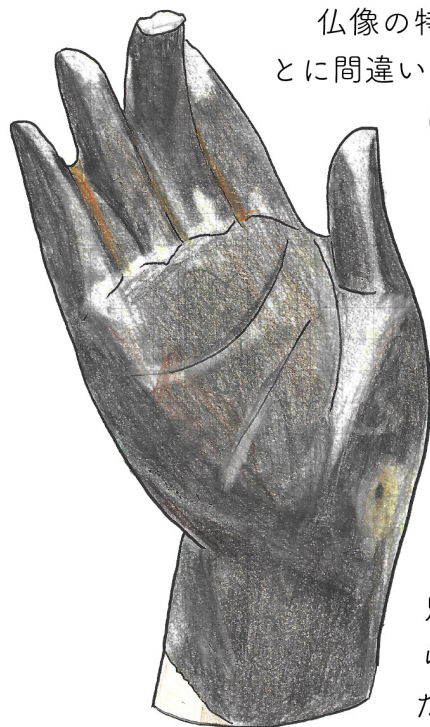
香薬師如来（新薬師寺）

仏女新聞

（興福寺）銅造仏頭

盗難の被害にあったのは、今から約 70 年以上も前の第二次大戦のさなかのことだ。今回見つかったのは右手だけで、他の部分はまだ見つかっていない。

高さ十センチに満たない手のひらに、大きな存在感がある。とても彫刻の一部とは思えない。小ぶりで厚みのある造形は小さな子どもをイメージさせるが、それ以上に端正な曲面が見せる造形美と仏像としての存在感が印象的だ。

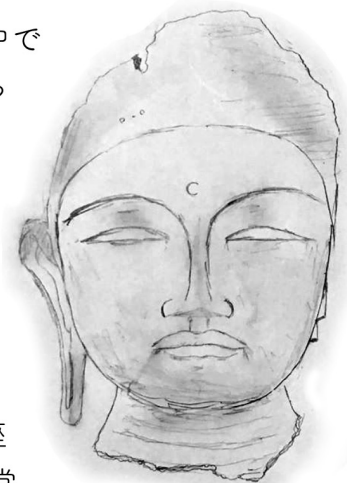


仏像の特徴がよく示されるのが顔であることに間違いはないだろう。しかし、それだけではない。私が見ているこの香薬師如来には顔がないが、手から香薬師如来のたたずまいを感じるのである。仏像の一部だから仏像の手であるわけではない。この物体は、まぎれもなく仏像の手で、手のひらだけで仏像の雰囲気をもっているのである。

次に仏像に会う時には、手の表情から姿や顔を想像してみようと思ったりする。香薬師如来の手のひらが、仏像の見方を少し変えてくれた気がする。（2017 年 1 月 4 日）

興福寺国宝館は耐震工事のため休館中である。そのため、阿修羅像と人気を競っていた銅造仏頭が 80 年ぶりに東金堂に戻っている。

仏頭はかつて東金堂本尊としてまつられていたが、のちの火災で身体を失った姿で長らく須弥壇の下に安置されていた。発見されたのが 80 年前のことである。こう書くと仏頭の東金堂還座は当然のようだが、満員と見える東金堂に仏頭が安置できるとは思もしなかった。



白鳳の微笑みと評されるお顔は、数奇な運命と向きあってきた緊張感を漂わせており、私にはあまり微笑んでいるように見えない。しかし、東金堂に鎮座した今日の仏頭は、間違いなく微笑んでいた。今まで見せたこともないような晴れ晴れとした表情だった。東金堂内に差し込む西日の反射で頬が左やや下方から照らされる。その光のせいか心持ち頬を緩めているようにも見える。数百年間何事もなかったかのように穏やかな気配だ。

仏頭が東金堂に還座する機会ができたのは、人間界の都合だろうか、それとも仏頭のご意志だろうか。香薬師如来の手のひらが私の仏像の見方を変えてくれたと書いたばかりだが、仏頭のお顔を見て少し心が揺らいできた。（2017 年 1 月 7 日）